



## 北海道のタンチョウも国際化？

百瀬 邦和

今冬は北海道の方々に、タンチョウ以外のツルが現れて話題となりました。2023年9月末に日高地方の様似町でナベヅル1羽とカナダヅル2羽と一緒にいるのが確認されました。この3羽は一度千歳市に移動したようですが、年明けには再び日高に戻り越冬したようです。これとは別にナベヅル1羽が11月から大樹町で確認され、こちらはタンチョウと一緒に行動していました（表紙写真）。

一番話題になったのは鶴居村の給餌場に毎日来ていたマナヅルとカナダヅルです。どちらも1羽で別々の給餌場に現れ、タンチョウと一緒に餌を食べ、寒い冬をなんとか無事に越冬しました。これら3種のツルの他に、数年前から標茶町で1羽のクロヅルが越冬しているので、今冬はタンチョウを含めて合計5種のツルが北海道で越冬したことになります。タンチョウ以外のツルは北海道では繁殖していないので、これらのツルはいずれも大陸から飛んできたはずですが、カナダヅルとナベヅルはしばらく前から繁殖地が拡大しているという情報がありますし、マナヅルも近年は越冬数が増えていますので、今年はその大陸の状況が北海道に現れてきたのかもしれませんが。

巻頭言 . . . 1

2024年カウント調査 . . . 2

2024年俵橋プロジェクト . . . 4

サロベツの標識調査 . . . 7

<連載>

鳥と自然と人② . . . 7

<活動記録> . . . 8

それではタンチョウはどうなのでしょう？ これまで北海道のツルといえばタンチョウ、そして北海道のタンチョウは留鳥というのが定説でしたが、もしかしたら他のツルと同じようにタンチョウも大陸から飛んできている可能性があるかもしれません。実際、当会顧問の寺岡教授の研究で大陸型の遺伝子を持った少数のタンチョウがサロベツ湿原で確認されています。

日本のタンチョウはその分布が北海道の一部地域に偏っており、海や国境を跨いで渡る大規模な移動がないため、これまでの社会的普及活動や保護活動において、北海道の外（＝北海道島以外）を意識することが少なかったように感じています。今冬北海道に飛来したナベヅルなどのツルたちを通して、私たちがタンチョウに関わるこの意味について改めて考え直す良い機会にしたいものです。

# 2024年 総数カウント調査を行いました

百瀬 邦和

Report for count survey by RCC in 2024

今年2024年も1月18日～2月6日まで冬の総数カウント調査を行い、予定通りの調査を無事に終了することができました。このうち1月19日～1月31日までは大勢の調査員が参加する調査を行い、その前後に1～2班で補足調査を行っています。この調査によって、現在、北海道に生息するタンチョウの総数と越冬地の分布がわかります。そして、この調査はタンチョウ保護のための重要な情報であるばかりでなく、調査に参加して下さる個人、団体の皆様に、タンチョウの保護活動の現状を知っていただく機会になることで、本会の活動でも意義深いものになっています。今回はのべ169名の皆さんが参加していただきました。昨年に続いて今年のカウント調査の様子を紹介し、結果の概要についてご報告いたします。

## 音別・白糠（1月19日）

今冬の音別の様子は例年と大きく違っていました。何時もチームを組んで朝から定点調査を行なっている給餌場にはタンチョウがほとんど来ていませんでした。ところが給餌場の1kmほど上流の畑に朝から100羽以上のタンチョウが集まりました。

給餌場の高橋さんによれば、昨年秋に根釧地方でタンチョウの鳥インフルエンザが発生したため、給餌場での給餌開始を遅らせる措置が取られました。その間にタンチョウは給餌場から1km程離れた畑に毎日のように撒かれていた牛舎からの廃棄物に群がっていたそうです。積雪後もその状況は続いているとのこと。8年前の2016年、鶴居村の調査で、強風でデントコーンが倒伏したままの畑に沢山のツルが集まった状況が思い出されます（本誌27号参照）。調査当日もその状況は変わっておらず、ツルの群れは、塹をとっていた給餌場に隣接する川から次々と畑に飛んできました。調査班は畑を管理している牧場の了解をいただいて、畑に入るトラクター道や道路脇から調査を行いました。

今年も給餌場の高橋さんには大変お世話になりました。カウント調査に参加して下さり、さらに巡回班との打ち合わせの場所を提供していただくなど、いつも本当にありがとうございます。

牛舎の廃棄物(生の有機肥料)が撒かれた畑に集まるタンチョウの足環を確認する(音別)  
Crane reserch at a field where barn waste has been spread



## 阿寒（1月20日-21日）

集合時には氷点下20℃程もあったのですが、2日間とも好天で、日中は風もなく快適な調査でした。阿寒給餌場は従来の給餌場である観察センター前（畑）と、水路とフェンスで仕切られたビオトープの2カ所で給餌が行われています。1カ所からは両方が見渡せないため、調査班はそれぞれの場所に分かれて調査を行っています。阿寒給餌場では早朝にトラクターによって広範囲に給餌し、午後は少量をビオトープ側のみに給餌しています。

ツル達もそれを知っているので、全体ではビオトープにいる数が多くなっていました。ツルは両方の給餌場を頻繁に移動していましたが、両班の記録はほぼ完璧でした。ただ、ビオトープでは池の中に入っている一部のツルが土手の陰に入っ見えなかった場合があり、カウント担当者も事後の集計でも苦労しました。これまで阿寒では給餌場の西にある舌辛川の塹から丘を超えて飛来して来る群れが観察されていたのですが、今年はそうした状況は見られませんでした。



阿寒給餌場：観察センター側から見た調査中のビオトープ班  
Reserch team at Akan Feeding Station Biotope Site

## 十勝川流域（1月22日）

例年の通りJR池田駅に集合して打ち合わせ、1班2名ずつの5班に分かれてそれぞれ車での巡回調査を行いました。調査範囲が広いので十勝川上流と利別川上流は別日に調査をしました。積雪のために十勝川も利別川も堤防道路はほとんど走れず、河川内や樋門下の調査はできませんでした。午後は早めに解散したため、帰り際に念のため、気になっていた牧場を再チェックしたところ、調査時の2倍以上の数のツルの群れが見つかるというハプニングがありました。これが今回十勝で確認された最大の群れとなりました。

## 十勝南西部（1月24日）

予定していた23日に大雪の予報が出ていたため、1日ずらしての調査となりました。当日は天候が回復し、心配していた積雪による道路閉鎖もなく予定通りに調査ができました。午前中は忠類地区の当縁川沿いの踏査を軸に周辺を4班が監視する体制で調査を行ないました。午後は大樹町に移動し、6班に分かれて広尾町まで巡回調査を行いました。前日の雪で各所の堆肥山が埋まったためでしょうか、紋別川やメム川の中にツルが群れていたのが目立ちました。その中に以前から同地域で目撃されていたナベヅルが混じっていました（本号表紙の写真）。

## 中茶安別（1月25日）

強風が吹きました。多くのツルは風を避けて給餌場の西側の林沿いに長い間留まり、林を出入りする以外にツルの動きが少ない日でした。今年は鳥インフルエンザの監視のためにチャンベツ川の畔に2台の監視カメラを設置しました。カメラから分かったことですが、タンチョウは朝に畔を飛び立つと夕方まで畔付近には全く現れません。

調査で畔に隣接する雪原を観察していた定点班から川付近に残っているツルの報告はなかったため、調査日に給餌場を利用したツルは給餌場と西側の林（とその林の奥にある沢）にずっといたと思われる。さらに巡回班はチャンベツ川とその支流の平野川、片無去川沿いの牧場で、給餌場に来ないツルを確認しました。

## 茅沼・標茶・弟子屈（1月26・30日、2月3日）

予定日の26日は早朝は穏やかな天気だったにもかかわらず、標茶駅前に集合した頃には強い風が吹いていました。多くの調査員が必要なジュンちゃん牧場周辺は3班で調査を行いました。

積雪によって道々標茶－虹別線が閉鎖され、上流域の調査が出来なかったため、30日と2月

3日の追加調査で全域をカバーしました。ジュンちゃん牧場では、歩いて堤防から観察する班、堤防の向かい側の道路から観察する班、牧場内を車で巡回する班の3班に分かれて調査しましたが、強風のためか、早い時間から畔の釧路川に戻るツルが出はじめ、例年の調査とは様子が違いました。近年は10羽以上の群れが確認されていた茅沼地区での確認数が、今回少なくなったのは、やはり強風が影響したせいかもしれません。

## 鶴居村（1月27日-28日）

今年も中雪裡と下雪裡の2つの給餌場で同時に調査を行いました。下雪裡は給餌場の定点班のほか、下久著呂、幌呂川、給餌場周辺の下雪裡地区を巡回する3班で調査をしました。中雪裡は雪裡川の上流方面を1班が巡回しました。中雪裡の給餌場を管理する日本野鳥の会ビジターセンターで話を聞くと、「ここ最近、朝に給餌場近くの雪裡川の畔に勝手に入る観光客（カメラマン）が増えている、タンチョウを飛ばしてしまい困っている」とのことでした。調査初日に丁度私たちが到着したのとほぼ同じタイミングでツルの大群が川から給餌場に飛来し、調査班は大慌てでした。その日の朝に畔への人の侵入があったのでしょうか。夕方に給餌場から畔へ飛去したタンチョウの大半は、朝と逆の方向の南へ向かいました。

両給餌場とも、ツルが給餌場と隣接する林を行き来するので、調査後の記録整理は例年通り大変でした。

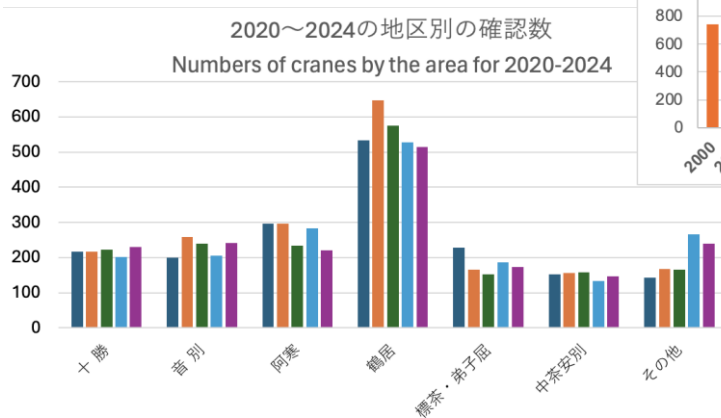
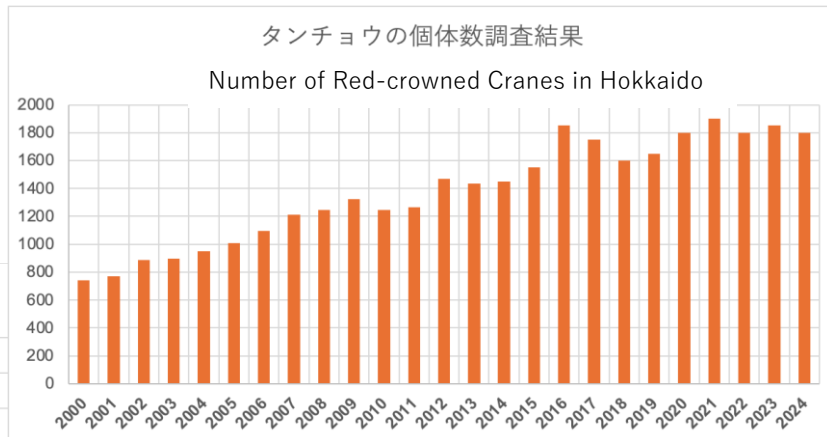
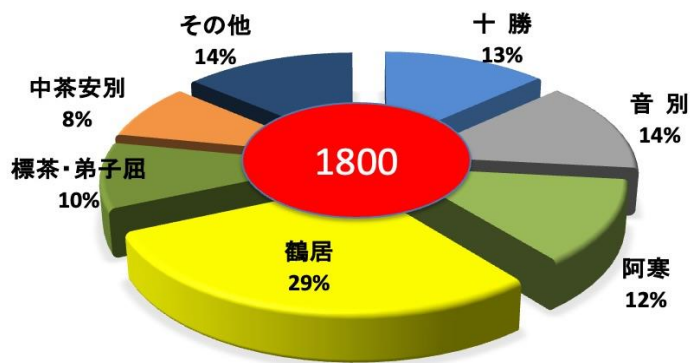
## その他地域：浜中・根室・オホーツク・日高ほか（1月29日-2月6日）

昨年までの調査で、タンチョウが午前の早い時間帯には牧場など確認可能な場所に出てこないことが判明し、今年は現地での調査開始時間を昼頃にずらしました。そのため各班が1日の巡回範囲が狭くなり、調査日数が増えました。

しかし、この変更で西別川の最上流付近での初確認があり、根室地方北部の確認数と確認地点が増えました。昨年初めて越冬数が二桁となったオホーツク地方、そして3シーズン連続して二桁の越冬数を維持している日高地方の状況は、概ね昨シーズンと同様でした。近年、道央で繁殖つがいが増加していることから、その主な越冬地とされている日高地方での調査は、範囲を2つに分けて行いましたが、新しい越冬地は確認されませんでした。

今年のカウント調査結果は総数1800、内幼鳥230羽となりました。総数は昨年よりもわずかに少ないものの、ほぼ変わりなく、過去5年間概ね変化なしという結果になりました。一方、幼鳥数は過去最高となり、総数に占める幼鳥の割合も高い水準でした。昨年の繁殖状況が良かったのでしょうか。特に、大給餌場のない浜中・根室・オホーツク・日高等で幼鳥の割合が高く、繁殖つがいの密度が低い所でヒナの成育が良いということが予想されます。阿寒と鶴居の大給餌場とその周辺地域では減少し、根室などそれ以外の地域で増加傾向が見られています。なお、2月6日以降に確認された足環付き個体のうちカウント調査の際に未確認の個体とその家族は3月31日までの範囲で総数に含めました。ただし、時期が異なり移動した可能性が高くなるため、地域別の集計には反映させていません。

## 2024年のカウント数と地域別割合 PERCENTAGES OF NUMBERS BY THE AREA IN 2024



## 2023年 俵橋プロジェクトのご報告 Report on the Tawarabashi Marsh Project

2022年は耕作畑がクマとシカに荒らされ、デントコーンはニオを作るにはギリギリしか収穫できなかったため、2023年は畑の耕作を断念しました。ニオを作るためのデントコーンは、以前から私たちの俵橋プロジェクトに協力して下さっている中司牧場のご厚意により、牛の飼料用に栽培している畑から200本ほどを提供していただきました。9月30日にデントコーンを刈り取り、乾燥させるために俵橋湿原のニオ設置地点の近くに運んで一時置きしていたのですが、4日後のニオ設置時には、もうシカに荒らされていました。しかし壊滅的な被害ではなかったため、現地のメンバーや協力者など7名でニオを完成させました。またRCC元理事のJ. ブラムさんの紹介でアメリカから来釧中のパトリア・ウォール Patricia Wahleさんが参加されました。

今冬は俵橋湿原から遠くない場所でタンチョウの鳥インフルエンザ感染死が確認されたため、監視カメラを早めに作動させ、シカの食害防止を兼ねて、雪の積もるまでニオをブルーシートで覆う措置をしてのスタートとなりました。今年は作業の様子と監視カメラから送られてくる画像を使って今冬の様子を報告します。



デントコーンを提供していただいた中司牧場の畑

ニオの作製作業の様子です。畑で刈り取ったデントコーンの茎で骨組みを覆い、中にタンチョウの餌のトウモロコシ粒が入ったポリバケツを置きます。ポリバケツの下に穴があり、自動給餌するようになっています。

ニオで風と雪を防ぎ、さらに積雪で埋まらないようポリバケツは台の上に乗せました。11月初旬にニオが完成し、何時雪が積もっても大丈夫です。



以下は監視カメラの写真です。ニオの本体はシカ対策としてブルーシートで覆ったのですが、それでもタンチョウ用に開けておいた入り口からシカがトウモロコシ粒を食べにきました。キツネが来たのはトウモロコシが目的か、あるいはトウモロコシを食べにきたネズミが目的かもしれません。



シカ対策を徹底して全体をシートで覆っていましたが、12月に入ってからのはじめてタンチョウが現れました。それまでは周辺の畑で餌が拾えていたのでしょう。12月13日に初めて本格的な積雪があり、これが根雪となりました。早々に、ニオの脇に設置したペットボトルの中のトウモロコシ粒を食べにカケスが現れました。これはタンチョウの誘引用に用意したもので、イソップ物語（キツネとツルのお話し）を応用しました。





タンチョウが来たのを確認してシートの前を大きく開け、6日後にはシートを撤去しました。ニオの周りにはツルの足跡がいっぱい付いています。



ニオに最初に来たつがいの1羽には足環が付いていたのですが、1月3日にはヒナをつれた別の家族も現れました。その後さらに2羽共に足環のない第3のつがいも現れるようになりました。



ニオの周りで風が回るのでしょうか、吹雪の後には風下側の餌入り口付近では地面が見えるほど雪が飛ばされました。

3月末には雪解けがはじまりました。今年の春はすぐにニオの撤去せず、周辺にトウモロコシ粒を撒いて、奥に見える中林牧場の周辺に残っているタンチョウの誘引を続ける予定です。中林牧場には昨年の総数カウント調査で10羽ほどのツルがいましたが、昨年の種まきシーズンはこれが30羽以上に増え、牧場のデントコーン畑で食害問題が起きていました。ニオは牧草地内にあり、畑からも離れているためこの周辺にタンチョウを惹きつけて食害を減らす実験をおこなう予定です。

この実験のために新たに2台目の監視カメラを設置しました。

## 2023年度のサロベツでの標識調査の話 Banding survey in Sarobetsu in 2023

2023年はサロベツ湿原のタンチョウ標識調査をサロベツ・エコネットワークが始めてから3年目になります。RCCは共同事業と位置付けてこの調査に全面的に協力してきました。今秋も収穫後のデントコーン畑に大型の無双網を仕掛けてタンチョウを捕獲し、足環とGPS発信機を装着する調査を行いました。今回はGPS発信機を3台用意し、3羽以上の捕獲・放鳥を目指していましたが、10月19日からの調査では1羽のみの放鳥でした（足環番号471）。

再度日程を調整してのぞんだ11月12日からの2回目の調査は、前日に季節外れの大雪が降り、いつタンチョウがサロベツから移動してしまうかを心配しながらの雪の中の調査となりました。まずは無双網の設置のための除雪作業から始まりました。この調査でさらに1羽の捕獲・放鳥に成功し（足環番号472）、合計で2羽にGPS発信機を付けることに成功しました。

ところが、471のGPS発信機は放鳥した翌日に脱落、あるいは破壊されてしまったようで、情報はほとんど得られませんでした。471は11月に観察で生存が確認されています。

2台目の発信機を付けた472はサロベツ湿原から天塩町南部を経由して下川町まで移動しました。しかし、同地でタンチョウの体に発信機を取り付けているテフロンリボンが切れ脱落してしまいました。その後、足環の確認情報から472は十勝に移動して越冬したことがわかりましたが、下川町からの移動ルートを知ることはできませんでした。次のシーズンもこの調査の継続を予定しているので、捕獲に使う無双網とGPS発信機の装着の改良を考えています。



タンチョウに警戒されないよう、作業は夜に行います。

### <連載> 鳥と自然と人⑱ ネコは野鳥の最大の天敵

石 弘之（本会顧問）

#### Birds, Nature and people #19

飼った人ならわかるに違いないが、ネコはペットのなかではもっとも野生の本能を残している動物のひとつだ。野生動物に危害を与えることも多い。国際自然保護連合（IUCN）はイエネコを最悪の外来侵入種100種の1種に指定している。とくに、ソトネコや野良猫は、野生の鳥類、哺乳類、爬虫類の63種の絶滅に関与しており、シギ・チドリなど減少の原因にも挙げられている。

米国漁業野生生物局によると、ネコは優秀なハンターで、遊びの一環として鳥を狩る。米国で飼われる1億匹といわれるイエネコは、年間10億羽の野鳥を捕えると推定されている。野良猫まで含めれば、毎年約24億羽の鳥が殺されているという。オーストラリアでは、毎日100万羽の野鳥がイエネコに殺され、野良猫まで含めれば毎年約3億6000万羽が殺されるという。

目下、大きな問題になっているのがハワイだ。ヒトの侵入と増殖がはじまるまで、ハワイは野鳥の楽園だった。地理的に孤立しているうえに、捕食動物が存在しないこともあって、アイウィ（ハワイミズナギドリ）、ネネ（ハワイガン）、マウイオウムなどの固有種を含む生物多様性に富んでいた。

ところが、1700年代後半にハワイ諸島にネコが導入されたことにより固有の在来種が捕食され、広範な開発と環境汚染が野生生物を追い詰めた。猫が近くにいるだけで鳥に重大な影響を与える。ヒナの健康状態が悪化し、巣作りの成功率が低下することがわかっている。

鳥とネコの両方が好きなユリアさん、さあ、どうする。

## <活動記録> (2023年12月～2024年3月)

- 12月1日 第13回地域づくり小委員会・第39回再生普及小委員会に出席(百瀬、井上)  
環境省 第1回タンチョウ鳥フル対応検討 WGに出席(百瀬)
- 12月5日 河川協力団体の意見交換会に出席(百瀬)
- 12月6日 鳥フル監視事業のため、釧路川(標茶町)に監視カメラ設置
- 12月7日 雪裡川の自然再生事業について北海道河川財団・北海道開発局と意見交換(百瀬)
- 12月8日 北海道大学 愛甲教授からの根釧地方の学術的研究(環境総合推進費プロジェクト)についてのヒアリングに対応
- 12月8日 運営会議(9名参加)
- 12月12日 鳥フル監視事業のため、阿寒川(釧路市阿寒町)とチャンベツ川(標茶町)に監視カメラ設置
- 12月26日 宮城県丸森町「タンチョウ復帰を考える会」と今後の活動等について打ち合わせ  
(於:丸森町あぶくま荘 百瀬)
- 1月13日 カウント調査勉強会 20名出席 (於:わっと 百瀬)
- 1月19日-2月6日 タンチョウ冬季総数カウント調査
- 2月4日 サロベツ・エコネットワーク報告会「サロベツのタンチョウ・ガンカモ」にweb参加 (百瀬)
- 2月8日 環境省 第2回タンチョウ鳥フル対応検討WG会議に出席(百瀬)
- 2月21日 環境省 令和5年度 環境省タンチョウ保護増殖検討会に出席(富山)
- 2月22日 第26回 湿原再生・第27回 河川環境再生合同小委員会に出席(井上)
- 3月1日 運営会議(5名参加)
- 3月5日 北海道開発局 第16回北海道横断自動車道(阿寒～釧路)タンチョウ保全対策検討会に出席(百瀬)
- 3月6日 くしろせんもん学校で特別講演(百瀬)
- 3月13日 第30回釧路湿原自然再生協議会に出席(井上)
- 3月20日 来釧したAmerican Bird ConservancyのDaniel Lebbin氏に対応(百瀬K、百瀬Y)
- 3月23日 宮城県丸森町で行われた鶴供養祭に出席(金森)

### 最新の情報はこちらで!

ホーム  
ページ



instagram



Facebook



### < 会員 > ( 3月 31日 現在 )

会員数 : 149名 (運営会員 : 24名、個人サポート会員 : 125名 (卵 78、ひな 44、若鳥 2、成鳥 0、終身 1))

Red-crowned Crane Conservancy (RCC) newsletter

# TANCHO

Fifty-first issue April, 2024

#### <表紙写真 Cover photo>

タンチョウと一緒に越冬したナベヅル

A hooded crane wintering  
with red-crowned cranes

撮影者 : 塚田 晴朗

認定特定非営利活動法人

タンチョウ保護研究グループ

〒 085-0036

北海道釧路市若竹町9番21号

Tel/Fax 0154-22-1993

e-mail: tancho1213@pop6.marimo.or.jp

URL: http://www6.marimo.or.jp/tancho1213